
バイト彼女日記！

§ 和々 §

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイト彼女日記！

【Nコード】

N0240I

【作者名】

§和々§

【あらすじ】

あたしは泉先輩に言われて部活の後も一人残ってたのね？そしたら遅れて来た先輩に言われたのが…バイトで彼女になれたって！？

てゆーかなんで!?

「頼む!...!二週間!...!二週間でいいんだ!...!」

そんなこと言われたって!...!

無理だよそんなの!...!

あたしの名前は”サイトウ 斎藤 ユウキ 優紀” 優紀なんて名前をしてるけど高校生
一年生の女の子だ

部活は剣道、得意科目は体育、苦手科目は数学、

超ポジティブで楽観的な考え方が売りの女の子

そんなあたしが！そんなあたしに！

ピンチが到来していた！

「優紀」今日帰りにマック寄って行かない？」

「ごめんあみ、もうちょっとだけ残ってくわ」

悪いね、でも今日はマックには寄れないんだ」

この娘は”栗栖あみ（クルス アミ）”、アーミンとかマロンちゃんとか言われてる校内でも評判の可愛娘ちゃん

「そっか」それは残念だ」

あたしは知っている

あみは可愛いと評判。でもそれが祟って男子のみんなは想いの丈を語ったところでフラれると思い込み逆に告白を受けないのだ

そう、勝手に茨の道扱いを受けているのだ

かわいそうに…

「じゃあまた明日ね」

「明日はマック付き合って貰うよ?」

「今日だって一人でいけばいいじゃん」

「やだよ恥ずかしい!」

あみは駅の近くのマックでバイトしているサッカー部の先輩に恋をした

「毎日マック行ったらお小遣足りなくなるよ」

「うう…」

「いい加減声ぐらいかけたらいいんだよ」

「~~~~っ!もういい!マック行かないで帰る!」

「っそ、またね」

「んっ！最悪だし！」

スクバを乱暴に担ぎ行ってしまった

いやぁ可愛いねっ

あみが帰ってから剣道場で一人残ったわたしは素振りを済ませ片付けをするところ

―ガラガラッ―

剣道場の引き戸が開き泉先輩が現れた

やっとかいな

「ごめんごめん！大会の遠征費がなかなか降りなくてさ、」

まだ何も言ってますんよ先輩？

「いやあ、呼び出しておいて悪いね！待たせる気はなかったんだよ」

ああそれでこんなにパニックしてるのか

「先輩のせいじゃないんだからあんまり謝らないで下さい！こっちも申し訳なくります！」

「え、本当！？それは悪かった！」

また～

「これは参った！部長会議が長引いたせいで優紀を呼び出したことの詳細を話す時間がないみたいだ」

頼みがあって呼び出されたがとんだハプニングのおかげで何やら大変そうな予感

「頼みだけ言ってくれたらいいですよ？」

「そう？いや！でもやっぱり詳しく言っていないのにこれは…」

「生徒の最終下校時刻まであとチピツとですよ～」

「ああ～言うしかないのか～！」

「言わないと帰りますよ～？」

「分かったから！よし！じゃあ言っぞ！」

何が来るんだ？

全然検討もつかないな

これはワクワクってやつか？

「バイトして欲しいんだ！二週間！！二週間の間！俺の彼女役をや
って貰いたいんだ！」

.....！？

「はい？」

「頼む！！！！二週間！！！！二週間でいいんだ！！！！」

そんなこと言われたって！！！！

無理だよそんなの！！！！

なんて単純な！

「ほら！やっとだ！」

「~~~~！」

長いトンネルを抜けたあたし達が見たのは

「「海だああ！！！！！！」」

「分かりましたよ……」

「ほんとに！？ありがとうございます！」

あゝあ、言っちゃったよ

「今日はもう時間ないですから明日詳しく聞きますね」

頭ん中を整理する時間をください

「わかった！じゃあ、西葛西駅で待ってるから最低限のお泊りセツトで6時集合！」

……へ？

「電車の中で詳しく言うから！またね」

ーガタンガタンー

海岸沿いに敷かれたレールの上を走る電車に泉先輩と乗っているわけだが

「えっと、じゃあまず注意事項ね」

あ、先輩！それあたしのサイダー…
先輩のはこっち…

「ああすまないね、代わりに俺のサイダー飲んでいいよ?。」

「いりませんよ…」

「さて本題、優紀は美術部で成績優秀、俺とは体育祭の実行委員で知り合って」

「知り合って?」

「体育祭が成功したその日に告白してきたと、」

「あ、はい、分かりました…」

「んでもって料理も完璧。家事はやるうと思えばできる感じ。」

「最後の設定だけは肯定できそうです」

「よろしい!じゃあもうそろそろだから……ほら!」

先輩の指差した窓のそとには…

「…………と、トンネル」

「3、2、1、ほら！」

「…………トンネルです、先輩」

「……………」

「指、下ろしてください」

もうかれこれ20分、いや30分だろうか？

あたし、もうトンネルの壁、見飽きたよ

そっだ、なんでこうなった？話を整理しよう……

さっきの話を思い出すんだ

「俺はさ、でっかい夢があって東京来たんだ」

はあ、そうなんですか

「それでさ、実家出るのをね？家族にめっちゃ反対されてさ」

読めてきたぞ

「昔からずっと一緒だった敏子姉ちゃんって言う隣の家の子だけは俺のやりたいようにしてやれって言うてくれたんだよ」

いい人じゃないですか！

「で、アパート借りてもう準備ができて、出発しよって日の電車を待ってる時に言われたんだよ」

死んでも守らないといけない感じのやつですね

『次帰ってくるときは反対してた家族をぎゃふんと言わせるもん持つて来い』

「それが”できる彼女”ですか…」

「いやあ〜これくらいしか浮かばなくな」

「ほら！やつとだ！」

「」
「」
「」

長いトンネルを抜けたあたし達が見たのは

「「海だああ！！！！！！」」

もしかして……

あたしと先輩が降りたこの駅は”海浜前駅” なんと適当な名前だろうか

読んで字のごとく！この無人駅の前に広がるのは、

さんさんと照り付ける太陽の熱をたっぷり溜め込んだゴミひとつない砂浜。

テトラポッドに小さな波が打ちつけているのが見える透き通ったコバルトブルーの海。

「どうだい？田舎でなんもないとこだけど海だけは自慢できるよ」

「本当ですね！水着持ってくればよかった……」

「敏子姉から借りたらいよいよ、敏子姉もつるぺただし」

「わたしはこの胸に不満はありませんから！」

ひとしきり討論を重ねたあたしたちは先輩の家を目指して歩き始めた

「おばあちゃん、康介もうすぐ着くって」

「はいよーじゃあ後はお盆までは楽できそうだね」

「いや、そうでもないみたいだよ?」

「
？」

「先輩の家は何人で住んでるんですか？」

海を背に歩き出したあたしたちを向かえてくれたのは田んぼだった

「ん」と、母さんとはあちゃんとじいちゃんと兄ちゃん夫婦だよ」

急に田舎じみて来たな
買い物とかどこでするんだろ

「今年は14日にみんな帰ってくるからもっと多くなるし」

コンビニは？ないな

雑誌は帰るまで諦めよう

「近所の連中も来るから大変だぞ」

あ、めちゃくちゃ暇じゃん！やばくない！？

「……聞いてる？」

とりあえずあみに暇潰しにメールの嵐だな

「おい……」

「敏子ちゃん聞いた？」

「何をですか？」

「康介、女の子連れ帰ってくるんですって」

まさか康介……わたしの言ったことを……

ああ〜なんかだるい

でつか〜〜い、お屋敷があつて、

これまたでつか〜〜い、前門があたしの前にあるわけだが、

「これが先輩の？」

「うん、これが俺ん家だ」

ええ！金持ちですよん！

部活前にわたしの”じゃがりこ”たかりにくる人の家とは思えない…

—ギギ〜ツ—

大きな扉の横、あたしの肩くらいの高さの勝手口が開いて

「可愛らしい声が聞こえると思ったらあなたが康介の？」

「あ、どうも斎藤優紀です」

「いいのよ、そんなにかしこまらないでわたしは広恵ヒロエよ、広恵おばさんって呼んでね」

はあ、綺麗な人だな

40半ばだろうか、こんなふうに歳取りたいもんだ

「母さん、敏子姉来てたりする？」

え、これ母さんですか？

うちの母さんなんか…

「ちょっと康介？今は優紀ちゃんと話してるのよ？」

つか、お母さん見た目若くない？

うちの母さんなんか…

「あ、はいはい、じゃあ自分の部屋行ってるから」

「え、ちょ！先輩！？」

「何かあったら母さんかばあちゃんに言いなよ」

「お、置いてくんすか！？」

あたしの質問に答えてくれはしなかった

広恵おばさんの横を抜けて勝手口から行ってしまった

「まあ、大事な彼女を置いてくなんてね」

「あつはい」

マジかよ、あたしどうしたら！？

「多分敏子ちゃんに会いに行くのよ、だから部屋には行かないわよ？」

「じゃあなんでそんな嘘を？」

「さあね」

「はあ、そうですか」

「もうすぐね、親類一同が集まるから康介の彼女なんですよ？お手伝いあるわよ」

「わかりました…」

なんだか思ってたより大変になりそうだな…

本当に二週間で帰れるんだろうか

「康介、広恵おばさんから聞いたよ」

「彼女の話？」

「あんた本当に……」

「俺の彼女は可愛いやつだよ」

「……………」

「多分お盆の手伝いに回されるだろうから行って話してみたら？」

「…ならいいけど」

いいところじゃん！

「それで？優紀ちゃんは康介のこと本当に好きなの？」

う……

「好きで付き合ってるんじゃないの？」

それは……

「えつとですね、先輩はカッコイイし優しいし剣道も強くてですね……」

あゝ頭真っ白かも……

「じゃあ好きってはっきり言える？」

待って……そんな……

先輩の家族のみんなに挨拶をして、先輩のお父さんと先輩の部活の話をして、

とりあえず部長としてよくやっています！って言ったら機嫌良くなっ
たみたいでお小遣くれて、

先輩のお母さんに呼ばれて夕飯の支度を一緒にして、

みんなでご飯を食べようと食卓にお料理を運んでいたら近所の人た

ちが集まって来て、

「優紀ちゃんって言ったっけ！？告白はどっちからしたの！？」

「優紀お姉ちゃんは康介お兄ちゃんのどこが好きなの？」

「こんなバカのどこがいいんだよ？今からでも遅くない！俺と遊んでみない？」

「結婚は考えたりするの？おばちゃんが結婚したときはすごかったのよ」

「広恵おばさん、こんな娘がうちに来てくれたら嬉しいな」

「……………バカじゃん」

「康介にもこんな嫁さんができて父さん嬉しいな！」

だのなんなので夕飯の席では大変だったが、

「気持ちいいわー彼女やって正確かもー」

お風呂だけはどこよりもいい

「旅館のお風呂みたい！」

あたしが足を伸ばしたくらいじゃ端には届かないくらい広い！とにかく広い！

「あ～～溶けてお湯になりたい～～」

タオルを湯舟に浮かべて端を掴み真ん中を残してお湯に沈める

「くらげ～～くらげ～～」

左手は湯舟の中でタオルを押さえたまま右手で空気を閉じ込めている部分を握り潰す

「ぶしゅわ～～」

つと、音を立てながらしばむ

「あゝ気持ちいいなゝ本当によゝ」

だらだらしていたら脱衣所と繋がるガラスに男の人のシルエットが

「優紀ゝ俺だけどゝ、風呂上がったらちよつといい？」

くもりガラスに浮かぶ先輩のシルエットはしっかり後ろを向いていた

「あ、じゃあすぐ上がりますね」

「ああいいよ、ゆっくり入ってくれ、無理言って連れて来たんだしさ」

なんだ、意外と優しいじゃん

「わかりました、じゃあ長風呂にします」

「んゝ、じゃあ後で」

先輩のシルエットは右手を揚げてみせてから歩いて行ってしまった

「……………泳げるんじゃない？」

先輩に言われたのもさっさと忘れて、平泳ぎを始めたあたしがお風呂を上がったのはそれから30分ほど後だった

縁側に座る先輩の背中に頭を垂れる

「すみません、泳いでました」

「泳いでいた？高校生が？風呂で？30分も？」

「はい、すみません」

食べ終わった枝豆の入ったお皿が二つ

「……まあいいや」

「反省してます」

「もういいよ、うちの風呂を気に入ってくれて何よりだ」

？

いつもならキレてたぞ？

「ちょっと歩こっか」

そう言つと答えを待たずに”つつかけ”を履いて少し行ったところから手招きしてきた

「え！あたしの靴玄関ですよ！」

「ああ、そうか！じゃあそこのバス停にいるわ」

行ってしまった…

マイペースな人だ…

「そうだ！サンダルサンダル！」

タオルで乱暴に頭を拭きながら玄関へ急いだ

先輩、それって…

どこまでも続くんじゃないかってくらいの田んぼの間を通る道路にバス停があるだけ

「今日はごめんな、勝手に連れて来ておいて俺だけでどっか行っ
さ」

バス停の横には背もたれすらない木製のベンチがある

「本当ですよー未来の娘だ！なんて言っ
て家事、雑務で腕がパンパ
ンですっ」

あたしと先輩はそんな雑なベンチの両端に距離を空けて座っている

「悪いね、後さ、もうひとつ話があるんだけど…」

先輩の家からは3分くらい歩いて来たな

「今の話の長さからするとこっ
ちが本題ですね？」

街灯と街灯の間、距離あり過ぎじゃないのか？

「その通りなんだけどさ…」

「あれですか？敏子姉ですか？おばさんから少し聞きましたよ？」

「ああ、母さんなんでも言っちゃうからな…」

「発恋の相手って聞きましたよ!？」

「う……まあ、とりま、その話は置いて本題いいかな？」

「あつ、すみません…恋バナだとテンション上がっちゃうんですよ、」

「そうなんだ、この本題もまあ恋バナだからさ、テンション上がってくれるといいかな」

「えー！ひょっとしてまだ好きってパターンですか!？」

「いや、そうじゃなくてさ…」

「そうですか、まあ好きだったとしても多分実らない恋ってやつでしたよ!」

「うん…あのさ、冗談抜きに聞いて欲しいことなんだけどさ…」

「は、はい!ちゃんと聞きます!」

「俺さ、久しぶりに地元の連中と話しててさ、みんなして彼女のこと、優紀のこと聞いてきてさ」

「……はい」

「そしたらさ、なんか優紀は今何してっかな?母さんの手伝いかな?とかさ」

「……………」

「ちっとずつ優紀のことが気になってきてさ」

「……………」

「で、もしかしたらバイト頼んだのも心の中で、どうかで、優紀のことが……………」

「……………」

「好きなんじゃないかって、

バイトでいいから彼女でいて欲しかったんじゃないかって、」

つまりどゆじと？

翌朝あたしを起こしてくれたのは泉先輩だった

「優紀〜起きろ〜」

あと5分、なんて言おうかと思ったけど

布団を借りている身、のそのそと起きだすしかない

「はよ起きろ〜飯だぞ」

「う……………う……………ん……………」

「……………優紀？」

「……………」

無理ッス、先輩、無理ッス

先輩の彼女役なんだし少しくらい寝過ごしたって悪いことないよね

「優紀がいないと、みんな揃わないと我が家ではいただきますをしないルールだから」

「……………う……………」

意識が遠のいていく、
この布団気持ちいいし
さすが金持ちの家だ

「無理矢理連れてくぞ」

「……………」

布団を取られそうになったけどあたしはなんとか踏ん張る

「お腹、すいてんだけど」

「……………」

あ、これいいかも

起き出さないと判断した先輩はあたしを布団ごとお姫様抱っこして下さった

「っしょっと、優紀ってちょっと重いんじゃない？」

「……重く、ない……」

「なんだ、まだ少し起きてんじゃん」

「……………」

「……昨日の話し覚えてる？」

「……………」

「いやだな、寝たフリすんなよ、人の告白なかったことにしちゃう気か？」

「……別にそういう訳じゃ……」

「考えてくれた？」

「……………」

「……………」

「……………すみません」

「……………そっか」

「でも、バイトはやめませんから」

「ありがとう」

それから食卓についたあたしは先輩のおばあちゃんに説法を説かれ

先輩をふったことが頭から離れずおばさんと皿を洗っているときにお皿を割ったりと

午前中はいいことが何ひとつなく

先輩は先輩でいつの間にかどこかへ行ってしまった

そんなあたしは暇になり気分もブルーで縁側に座り庭先の朝顔を眺めていた

「あの朝顔可愛いでしょ？」

玄関のところからあたしが見えたのだろう

敏子さんが声をかけてくれた

「これ、スイカね」

「あ、ども」

「うちで採れたんだよ？じいちゃんが持って行けって言っからさ」

「ありがとうございます、台所に置いて来ますから上がってください」

「あんま気使わないでね」

スイカを台所へ運ぶあたしにサンダルを脱ぎながら言った

台所に着いたあたしはとりあえずスイカをテーブルに上げて麦茶を二つ用意した

「ありがとね」

「いえいえ、それより敏子さんの家はどの辺りに？」

「ウチはね、この家の前の田んぼの向こう」

「へえ」

「…そんなことより聞きたいことがあるんだけど」

「あたしにですか？何でしょうか？」

「優紀ちゃんって康介の彼女なんだよね？」

「は、はい」

「それで？優紀ちゃんは今康介のこと本当に好きなの？」

「う……」

「好きで付き合ってるんじゃないの？」

「それは……」

「えつとですね、先輩はカッコイイし優しいし剣道も強くてですね
…」

あゝ頭真っ白かも…

「じゃあ好きってはっきり言える?」

待って…そんな…

「わたしには分かるよ、優紀ちゃんの思ってること」

「え?」

「広恵おばさんやこのおばあちゃんなんかよりずっと若いし」

「……………」

「康介も優紀ちゃんも見てて分かる、優紀ちゃんは康介のこと好き
じゃないって」

「……………」

「…なんでこんなところ来たの？」

あたしは何も聞いてないことにしてもらって代わりにすべてを話した

「そんなことだろうと思ったよ」

「すみません」

「ま、約束ならしっかり彼女役しないとだな」

「はい」

「あの朝顔さ、わたしが中学生で康介が小学生のときに一緒に育てたやつなんだ」

「そうだったんですか」

「あたしはこの子じゃないから毎日康介が両方の鉢に水やってたんだ」

「なんか意外ですね」

「でもなぜか康介のだけ枯れちゃってさ」

「それは大変だ」

「そうなのよ、それで康介朝顔に水やらなくなっでさ」

「両方枯れたでしょう？」

「そうなの、でも次の年に何故か康介の鉢にだけ朝顔が芽を出してね」

「へえ」

「それから毎年水をあげてるうちにこの庭のほとんどが朝顔になって今はおばさんが育ててるんだ」

「なんかいい話ですね」

「じゃ、わたしもう帰るよ」

「あ、さよなら」

「またね」

敏子さんを見送ったあたしはなんで朝顔の話をされたのか気にな
って仕方なかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0240i/>

バイト彼女日記！

2010年10月10日06時40分発行